




## 親の思い (我が子の障がいを受け入れた時)

昨年度、ある事業所だよりを読んでいたとき、何年か前の本校卒業生の保護者方の文章を見つけました。「我が子の障がいを受け入れた時」という見開き2ページにもなる長い投稿です。その文章を読みながら、私は本校で学んでいる子どもたちの保護者のお気持ちを改めて深く感じ、私たち教員もそういう保護者の気持ちをしっかり受け止めて仕事に携わらなければいけない、ということを確認しました。とてもお気持ちが伝わる文章ですので、2回に分けて紹介させていただきます。

(1歳半くらいから、お子さんについて疑問に思うことが出てきて、2歳過ぎたところでドクターから自閉症と告げられ、その説明を受けているところからです)

何を言っているのだろうと、受け止めきれない。……涙が溢れ顔を上げたらこぼれそうでした。先生の顔が見られなかった。会計のときに看護婦さんに優しい言葉を掛けられたので、とうとう涙が溢れてきて、主人が代わりに会計をしてくれた。



帰りの電車で、何も知らずに無邪気にしている息子とは対照的に、主人も私も言葉をなくしていた。……この子はもちろん兄姉の将来のことを考えると不安でどうにかなりそうだった。……あくる日、(心配して結果を待っていた友だちに) 涙ながらに話した。まだ私の中で受け入れなどできていないし、そもそも自閉症が何なのかよくわかっていなかった。でも説明していくうちに、私が何故こんなにも落ち込んでいるのか分かってほしくて……先生に言われたことを全て話した。一番の理解者ができて心強い。その日、それから療育センターに行き先生に話す。先生は初めから分かっていたようだった。先輩ママたちの会があるとすぐに紹介してくださった。どの方も明るく子どもの障がいを受け入れ接してみえる方ばかりで勇気をもらえた。私のよりどころとなり相談や情報をもたらえる場所になった。

……団体行動ができない我が子が誤解されるのがかわいそうで、自分もえらかった。先生や仲の良いお母さん方に話していった。同年の子どもたちの成長はめまぐるしく可愛い。その姿を見ることは辛かったけど、話したことで私たち親子に声を掛けやすくなったようだった。そんな温かい目が何より私たち家族の力になってくれた。いろいろな方に話すうちに、子供の障がいを受け入れていけたように思う。

(以下、次号に続く)